

観光まちづくりにおける外部アクターの役割に関する一考察

ー令和2年度「観光まちづくり演習」の実践よりー

Considering the Role of External Actors on Tourism-Based Community Development: A Practical Report on “Tourism-Based Community Development Activities”

竹 田 茉 耶

(地域文化学科)

キーワード：観光まちづくり，外部アクター，木綿街道，大学生

1. はじめに

本稿では、令和2年度に木綿街道において取り組んだ「観光まちづくり演習」の実践をふまえて、外部アクターが観光まちづくりに果たす役割について考察する。本稿では、外部アクターとは当該地域を訪れる観光客及び当該地域の観光まちづくりの推進に関与する地域外の主体とする。後者については、本学学生による調査研究に焦点を当てその役割について考察した。

その結果、以下のことが明らかになった。①観光客は、観光まちづくりの推進を担う団体や地元事業者など、観光客と直接接する機会を持つ人々に対して、地域が持つ価値への気づきを与える存在になっている。②外部アクターとしての大学生は、地域課題を客観的に検証し経済的利害がない立場から課題解決に向けてアプローチできる。③外部アクターとしての大学生は、地域内の主体同士を媒介する役割を果たすとともに、地域内の主体のまちづくりに対するモチベーションの向上に寄与している。

2. 「観光まちづくり演習」の概要

1) 科目の概要

同科目は、地域に固有の景観や歴史、生業や生活文化を活かした観光まちづくりの取り組みを実践的に学び、地域資源の活用、生活と観光が共存・融合した持続可能な地域づくりの仕組みや手法について理解を深めることを目的としている。令和2年度は地域文化学科の2年生17名が履修した。

平成31年度の開講以来、木綿街道を学びのフィールドとしながら学生自身が調査テーマを設定し、「持続可能な地域づくり」と「持続可能な観光」の両立について実践的に学んでいる。なお、演習の最後には現地報告会を開催し、地域の方々へ調査成果を報告するとともに、木綿街道の観光まちづくり

のこれからについて意見交換を行っている。

2) 木綿街道について

出雲市平田町にある木綿街道は、宍道湖西岸からの水路を利用した物資の流通によって市場町として栄えたまちである。とりわけ、木綿の生産が盛んになった江戸時代には、その集散地として繁栄した。往時の賑わいを偲ばせる「酒蔵」や「しょうゆ蔵」などの商家、旧家の建物がいまに残り、切妻妻入り塗家造りの家屋、海鼠壁や出雲格子など、独自の町並みが見られる。

2000 年頃から住民らによって、地域に固有の建物や町並みを保全・活用し次世代に継承する取り組みが始められた。「木綿街道」とは、こうした住民活動の中で命名されたものである。2008 年には、木綿街道の歴史的な景観を維持すべく「木綿街道まちづくり協定」が締結され、2012 年度までに 17 棟が住民協定に沿った改修（出雲市の改修助成のもと）が実施された。現在は、一般社団法人木綿街道振興会（以下、振興会とする）が中心となって、町並み保全と観光振興に取り組んでいる。外国人観光客を含め、県内外から多くの人々が散策に訪れている。

一方で、建物の維持・改修を安定的に行っていくことは容易でなく、現在のところ伝統的建造物群保存地区等の指定を受けていない同エリアにおいては、住民の理解と協力という点を含めて、いかにして町並みを保全していくかが大きな課題となっている。併せて、木綿街道の成り立ちを語る上で不可欠である雲州平田船川の保全と活用についても課題となっている。



図 1 雲州平田船川と木綿街道（新大橋南詰より）

3. 令和 2 年度「観光まちづくり演習」の実践

1) 演習の進め方

2020 年 10 月 10 日（土）に 17 名の履修生全員で現地視察研修を行った。当日は、振興会専務理事の平井敦子氏より、木綿街道の成り立ちとまちづくりの経緯についてお話いただいた後、町並み視察を行った。その後は、現地視察の振り返りと調査テーマの検討、調査方法の検討、調査実施の手順で進めた。木綿街道での現地報告会までの全体の流れは図 2 に示した。

なお、3. に記した内容は、別途、本演習科目の成果報告として取りまとめ

た報告書「2020 年度「観光まちづくり演習」成果報告」（島根県立大学人間文化学部地域文化学科「観光まちづくり演習」チーム編集・発行，2021 年 3 月 15 日）から抜粋・引用している。



図 2 現地報告会までの流れ

2) 3 つの調査テーマの設定

学生たちは「雲州平田船川の活用における課題と展開可能性」「木綿街道らしさが伝わる情報発信」「木綿街道の人を知る（住民同士の交流を促すしくみ）」の 3 つのテーマに分かれて調査に取り組んだ。それぞれのテーマの背景と目的の概要は以下のとおりである。

（1）雲州平田船川の活用における課題と展開可能性

船運を利用し栄えた木綿街道の歴史において雲州平田船川の存在は大変重要であると同時に、昨年度本授業で行った「地域住民が思う木綿街道の大事なもの・ことに関する調査」（以下、2019 年度住民ヒアリングとする）の結果を分析する中で、まちの人々が川を大切に思っていることが分かった。

しかし、現時点では雲州平田船川の活用はあまり行われていない。2019 年度住民ヒアリングでは「振興会内でも雲州平田船川についての活用をしていきたいと話してきた」という意見が見られた。そこで本調査では、地域として船川を活用したいという思いがある中で、その活用が進まない理由は何にあるのか、この点を地域の関係者へのヒアリングによって明らかにし、かわまちづくり（国交省主幹）の制度及びこれを活用した事例分析をふまえ、雲州平田船川の活用に向けた方策について検討する。

(2) 木綿街道らしさが伝わる情報発信

10月10日に行った現地視察から、住民の生活満足と観光客のニーズの一致には「質の良い観光客」が訪れる必要があると考えた。

ここでいう「質の良い観光客」とは、木綿街道の住民が見てほしいと考えているものに注目してくれる人、また、住民の生活に悪影響を及ぼさないような人である。このような観光客が木綿街道を訪れるために、住民が見てほしいと思っているものを、観光客に周知する情報発信の方法を模索する必要があると考えた。また、住民が見てほしいと思うものは「木綿街道探訪帖」にも紹介されていることから、「木綿街道探訪帖」の認知度を向上させる取り組みも同時に行っていく必要があると考えた。

昨年度本授業で実施した調査データを分析し、そこから「質の良い観光客に来てほしい」「木綿街道を見てほしい」「街並み、景色、雰囲気を見て感じてほしい」というポイントに注目した。本調査では、振興会へのヒアリング及び資料調査から木綿街道の情報発信の現状を明らかにし、木綿街道における情報発信の方法を提案することを目的とする。

(3) 木綿街道の人を知る（住民同士の交流を促す仕組みづくり）

木綿街道のまちづくりについて学ぶ中で、そのまちづくりに一から取り組んでこられた方々や、伝統ある家業を受け継いでおられる方々がいることを知った。そうした人々がどのような取り組みを行っているのか、その背景について興味を持った。また調べていく中で、そのような方々の存在や活動こそが、木綿街道の資産であると考えた。そこで、木綿街道での体験メニューを紹介した「木綿街道探訪帖」に掲載されているお店の方を取材をし、その内容をリーフレットにまとめ木綿街道に住んでおられる方々へ配布することで、地域の人が地域のことに改めて目を向けるきっかけになればと考えた。

3) 調査結果の概要と課題解決に向けたアプローチ

(1) 雲州平田船川の活用における課題と展開可能性

雲州平田船川の活用を妨げる要因として、大きく次の3点があることがわかった。①行政（島根県や出雲市）と地元団体とでは、雲州平田船川の整備・活用をめぐる方向性が異なる。②雲州平田船川の保全・活用に対する関心度について住民間で差がある。③雲州平田船川に船を浮かべて観光客向けに運行するといった活用を検討する際、その人手を地域内で確保することが難しい。ただ、過去には振興会がイベント時に限って船を運行させていたり、現在は住民有志で結成する「川並みの会」が年2回船川の清掃活動を行っていたりなど、保全・活用への地域の思いが見受けられる。

そこで、調査チームからの提案として、次の2点を提案した。①雲州平田船川の清掃活動を自然学習と位置づけ、地元高校生と大学生が参加すること

で、雲州平田船川の現状を広く知ってもらうとともに、船川の活用に向けた担い手の確保につなげる。②雲州平田船川沿いに、住民みんなで花を植えることで、船川への地域住民の関心と地域内のつながりを高める。この活動は大学生がサポートしつつ行う。

(2) 木綿街道らしさが伝わる情報発信

現在のところ、振興会が行っている情報発信は、紙媒体によるものは少なく、インターネット上での情報発信が主であることが分かった。

そして次の3つの課題が明かになった。①昨年度の調査では地域住民は「街並みを見てほしい」という思いを持っていることが明らかになったが、現在、振興会の公式インスタグラムの投稿には「食べ物・飲み物」や「イベント」に関するものが多く、「街並み」や「風景」の写真が少ない。②振興会の公式インスタグラムにおいてはハッシュタグが「#木綿街道」「#木綿街道交流館」「#雲州平田」などとなっており、これらのアカウントにたどり着くためにはピンポイントで「#木綿街道」と検索する必要がある。③「木綿街道探訪帖」を知ってもらうための取り組みを行っているにもかかわらず、現状はその認知度が低い。

そこで、調査チームからの提案として、次の4点を提案した。①街並みや木綿街道自体に興味のある人に情報発信する手段として、木綿街道のフォトコンテストを現地やSNS上で開催し、その作品を掲載した写真集（電子版）を作成する。②木綿街道を知ってもらう第一歩として、振興会公式インスタグラムのハッシュタグで示す範囲を「#島根」や「#出雲」というように広げる。③「分野別に専用のハッシュタグ」を使う。「イベント」「街並み」

「食」といった分野別のハッシュタグを作ることによって検索をかけた際、投稿に統一感が出せるとともに、見たい分野の情報にすぐにたどり着けるようになる。④「木綿街道探訪帖」の電子版を作成する。インターネット上で閲覧できるパンフレットを作成することで、多くの人に見てもらえることができるとともに様々な機能を付けることができる一方で、紙のパンフレットの場合に発生する印刷費を抑えることができる。また、電子パンフレット化することで使う側の利便性を高めることができる。

(3) 木綿街道の人を知る（住民同士の交流を促す仕組みづくり）

店舗での買い物や「木綿街道探訪帖」に紹介されている体験メニューへ参加については、その大半は観光客で地域住民の利用はほとんどないことがどの店でも共通していた。一方で、地域住民にこそ探訪帖の取り組みや、商品について知ってもらいたいとの思いをどの店も持っていることが分かった。

また、それぞれの店は木綿街道があることによって恩恵を受けていると捉えていることが分かった。店主らは、まちの名前がブランドとなり、各店の

価値をさらに向上させている。それは店の売り上げ、知名度の向上、ひいては存続を助けていると認識している。

調査チームでは、住民の多くは木綿街道にある店舗を「観光客が訪れる場所」として認識しているのではないだろうか、そのため、身近にある個々のお店にあえて興味・関心を向けることがない住民が少なくないのではないかと考えた。一方で、それぞれのお店が「木綿街道探訪帖」で提供している体験メニューは、日頃それら店々の身近に暮らす住民であっても十二分に楽しめる内容（知的好奇心を刺激し、非日常体験とも言い得る体験）であると感じた。

観光まちづくりでは、地域住民が地域にある「当たり前」に目を向け、その対象を客観的にとらえ直す過程が必要である。今回のヒアリングの成果がわずかでも、木綿街道に暮らす住民の方々が「木綿街道の光」に意識的になる契機となればとの思いで、リーフレット「木綿街道の光～働く人々を知る～」を木綿街道の約 130 世帯へ配布した。



図 3 作製したリーフレット「木綿街道の光～働く人々を知る」

4. 観光まちづくりにおける外部アクターの役割

1) 「観光まちづくり」とは

観光まちづくりは、2000 年 12 月にまとめられた観光政策審議会答申「21 世紀初頭における観光振興方策」の中で言及されたことで広まった言葉である（西村，2002，p. 16）。一方で、観光まちづくりの実践自体は 1970 年代以降のまちづくり運動の中で、地域社会の過疎化・高齢化に加え、観光を取り巻く社会状況の変化を受けて生成・発展してきた。

その実践は一般的に「地域社会が主体となって地域環境を資源として活かすことによって地域経済の活性化を促すための活動の総体である」（西村，2009，p. 12）と理解されている。

ただ、観光産業を活発化させることで地域経済の活性化を図ることのみが観光まちづくりの目指すところではない。観光まちづくりの理念とその実

践を理解する際に重要なことは「観光まちづくりでは観光はまちづくりの結果の1つのあらわれであり、まちづくりの仕上げのプロセスを意味している」(西村, 2002, p. 21) ことである。

なお、まちづくりについては、これも一般的には、住民主体の地域活性化の取り組みとして認識されている。ただ、これについても「まちづくりはボトムアップの住民主体の運動であるとだけ表現すると、重要な視点が抜け落ちることになる」(西村, 2007, p. 2)。まちづくりとは、「地域に居住するある一定の規模のまとまった集団が、その地域（その区切り方は問題によってさまざまであるだろう）を「わたしたちの共通の家」のように見なし、家の整理や掃除をするようにその環境（のある側面）に介入していくことから出発する動き」(前掲, p. 2) である。すなわち、その本質は、「わたしたち」という「主体の集団を生み出していく運動」(前掲, p. 3) という点にある。

したがって、観光まちづくりとは、これまで地域内部で構成されていた「わたしたち」に新たに「地域の外の人々」を取り込んだ運動だといえる。地域外の人々との交流の中で「主体の集団」を生み出しながら、地域課題の解決や地域資源の磨き上げと活用に取り組んでいくことで地域経済を活性化させるとともに、地域の人々が生き甲斐を持って暮らせる地域社会を築いていくこと、こうした点においてこそ観光まちづくりは期待を寄せられている。

2) 外部アクターとしての観光客が果たす役割

観光客は地域にどのような役割を果たすのであろうか。本演習で取り組んだ調査では、この点を主たる調査テーマとしたグループはなかった。しかしながら、木綿街道内の事業者へのヒアリング調査では、意図せずこの点についてうかがい知ることができた。

その役割は以下の点にある。木綿街道においては、観光客は振興会の関係者や木綿街道内に店舗を構える事業者など、観光客と直接接する機会がある人々に対して、木綿街道の持つ価値に気づく契機を与える役割を果たしている。具体的には、木綿街道を散策した際の感想をまち歩きガイドに伝えたり、店舗で買い物をした際や体験メニューを体験した際に店主に満足度を伝えたりといったことである。

来訪者とのこうしたやり取りの中で、振興会の関係者や木綿街道内に店舗を構える事業者は、木綿街道を「観るべき価値がある場所」「後世に残していきたい場所」として捉え直しをしていったことがヒアリング調査から明らかになった。このことは、訪問先で消費活動をすることによって経済面で地域社会の活性化に寄与することのみが観光客の役割ではないことを示している。一方で、観光客が果たすこうした役割は、彼らと直接接する機会を持つ人々

に限定されるため、こうした機会を持つことがほとんどない一般の住民への効果は限定的もしくはほとんどないといえる。

3) 外部アクターとしての大学生が果たす役割

次に、本演習科目での実践を通して見えた外部アクターとしての本学学生が果たす役割について、3点述べる。

(1) 地域課題の客観的把握と課題解決に向けたアプローチ

外部アクターとしての本学学生は、地域課題を客観的に捉え、経済的利害がない立場から課題解決に向けたアプローチを行うことが可能である。

たとえば、雲州平田船川の活用をめぐる課題と展開可能性に関する調査では、活用が進まない理由について、まちづくり的課題（内部要因）と行政施策面での課題（外部要因）を明らかにし、解決策の提案を行った。住民の関心度の差や担い手不足といった地域内部が抱える課題については、第三者が関与・支援することで問題解決に向かっていけることが少なくない。今回の調査では、大学生という外部アクターが関与しながら、船川沿いに花を植える活動を通して、住民の意識醸成を図っていく等の提案がなされた。

なお、こうした際の第三者についてはその者が経済的な利害関係を持っていないこと、客観的な視点を持ちつつも地域住民の思いを理解して関与・支援できることが重要である。その意味で、今回調査に取り組んだ本学学生たちはこの条件を満たす第三者であるといえる。

木綿街道内の事業者へのヒアリング調査については、木綿街道が持つ魅力について、実は地域住民はまだあまり気がついていないのではないかと、そうした地域の魅力や地域の中でまちづくりに奮闘する人々を知ること、木綿街道のまちづくりはさらに推進力を得るのではないかと、との問題意識から取り組んだものであった。こうしたことも、観光客とは異なる視点で地域を見る者だからこそ気づくことができた点であると考ええる。

リーフレットを地域住民に配布することは、それが直ちに観光客の増加につながったり経済的な潤いを地域にもたらしたりするわけではない。今回の取り組みの趣旨は、地域住民のまちに対する関心を高めることにある。その際、本学学生が取材しとりまとめたリーフレットの内容は、地域の外にいる者による木綿街道の評価として、住民の関心度を高めることに少なからず貢献できたのではないかと考える。

(2) 地域内の主体同士を媒介する役割

外部アクターとしての本学学生が果たした2つ目の役割は、地域内の主体をつなぐ媒介者となったことである。これは調査の過程で地域内の人々が意見を出し合う機会が創出されたこと、リーフレットを配布したことで住民が振興会や事業者の思いと取り組みを知ることができたことなどである。とり

わけ媒介者としての存在意義を感じたのは、演習の最後に開催した現地報告会であった（図 4）。



図 4 現地報告会会場の様子

この報告会は、木綿街道内にある木綿街道交流館内交流棟において、2021年2月20日（土）10時30分～14時30分の時間帯で開催した。当日は新型コロナウイルス感染症対策として、入退場自由のポスター発表形式で行ったため来場者数が気がりであった。しかしながら、悪天候にも関わらず約30名の方々が会場を訪れてくださった。振興会の関係者の方々はもちろんのこと、リーフレットと一緒に配布した現地報告会の案内チラシを見て来てくださった住民の方々、昨年末に木綿街道に開業した宿泊施設に勤める方々、山陰中央新報（2021年2月20日付）に掲載いただいた記事を見て松江市から来てくださった方、木綿街道の散策に訪れたついでに立ち寄ってくださった観光客の方々などである。

学生たちの発表に熱心に耳を傾け質問や意見してくださる姿が大変印象的であった。併せて、当日会場を訪れてくださった地域の方同士が本学の学生を巻き込みながら、その場で木綿街道のまちづくりのこれからについて熱く議論されていた姿はなお印象的であった。

（3）地域内の主体のまちづくりに対するモチベーションの向上への寄与

（1）、（2）で述べた内容をふまえた点になるが、本演習を通じた本学学生たちの取り組みは、地域内の主体のまちづくりに対するモチベーションの向上に寄与したと考える。なおこのことは、地域の中でまちづくりの機運を高めるだけでなく、そうした機運を地域外へ波及させるものになると考える。木綿街道のように、歴史的な町並みを保全・活用することをテーマとしてまちづくりに取り組んでいく場合、そこには出雲市をはじめとした行政の支援・協力が不可欠となる。外部アクターの協力を得ながら地域内の人々のまちづくり（町並み保全）への意識を高めていくことは、行政の支援・協力を

取り付ける上でも有効な取り組みであると考える。

5. まとめと今後の課題

本稿では、令和2年度に木綿街道で取り組んだ「観光まちづくり演習」の実践をふまえて、観光まちづくりにおける外部アクターの役割について考察した。その結果、観光客は主として地域のまちづくりの推進主体や事業者の意識づけに寄与していることが分かった。大学生としての本学学生については、観光客が接することがない主体へアプローチし、まちづくりの推進力を高めることに寄与していることが分かった。

我々は大学での学びの一環として地域で学ばせていただいている存在である。その中で、いかに地域の担い手の方々の苦労や葛藤を理解しながら、学びと地域への貢献を果たしていくのか、地域に関わらせていただく中でこれからも考え続けていきたい。

【参考・引用文献】

- 西村幸夫（2002）「観光まちづくりを考える」国土交通省総合政策局観光部・観光まちづくり研究会『新たな観光まちづくりの挑戦』（pp. 15-77）ぎょうせい
- （2007）『まちづくり学——アイディアから実現までのプロセス』朝倉書店
- 西村幸夫編著（2009）『観光まちづくり——まち自慢からはじまる地域マネジメント』（pp. 9-28）学芸出版社

【謝辞】

本演習の実施にあたり、一般社団法人木綿街道振興会の皆さま、木綿街道にお住まいの皆さまにご協力賜りましたこと、心より感謝申し上げます。